

---

# 魔女と心臓

明星紗枝

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔女と心臓

### 【Nコード】

N8991L

### 【作者名】

明星紗枝

### 【あらすじ】

こことは異なる世界『ソムニウム』の、四大国のうちの一つ、ズイムリア。

その国の王子は、白き王子と呼ばれ、どんな人からも愛される美しい容姿と、優しい性格の持ち主だった。どんなニンゲンでも彼を自分のものになりたいと思っていた時代に、彼の前に現れた魔女が、物語の終焉を描く。

これは、王子と魔女の約束から始まる、終焉と創造を繰り返す物語。

ハイファンタジーな世界がお好きな方はぜひどうぞ。

## プロローグ

【魔女と王子をめぐる御伽噺】

むかしむかし、まだ世界に魔法があふれていたころ。

雪の積もるとても美しい国ズィムリアに、一人の王子がおりました。銀色の髪と瞳を持つ、その真っ白い容姿から、彼は白き王子と呼ばれていました。

白き王子はこの世のもの全てから愛されていましたが、同時に全てから憎まれていました。彼に関心を持たない存在はなく、誰もが王子を自らのものにしてよう考えていました。

その中でも最も王子に執着したのは、風の強い国ウィンディアの外れに住む魔女でした。魔女は王子を自分だけのものにしてようと、雪国ズィムリアへ赴き、白き王子と、会見していた隣国・グロース  
「ヴルカーン帝国の皇子を殺してしまします。」

ありとあらゆる生き物が、魔女を怨みました。姫君たちは泣き崩れ、庶民たちは農具を片手に蜂起しました。人々は彼女を磔刑に処することを望みましたが、魔女はその間に西へと飛び去ってしまいました。

以来、王子は世界から消え、混沌とした時代が幕を開ける中、世界には明確な敵が誕生しました。誰しもがその名を恐れ、忌むべきものとして畏れました。

その魔女の名はエメリナ。これはそんな魔女と、王子をめぐる約束の物語。

+++

白い白い雪原の中で、黒髪の少女が高い高い塔の頂に向かって叫んでいた。それは遠く吼える犬のように、祈りのように悲しかった。

「待ってて、王子！ きつと私が助けるから……！」

頬を涙が伝っていくのを気にも留めず、彼女は箒に跨り、西を指して飛び立った。吹雪く景色は世界を純白に染めていくばかりで、ただただ無慈悲だった。白さは眩さを伴ってその力を増し、やがて全てが光に染められ。

## 第一話 荒野にて

少年は強烈な日差しで目が覚めた。ここはどこだろう。ぼんやりとまぶたを開けると、そこは荒野だった。

「あれ？」

間抜けな声が辺りに響き渡るも、乾いた風にすぐさま消されてしまった。晴れ渡る青空の下、乾いた土地でも強い雑草が数本生えているほかには、赤茶けた岩石と砂が延々と続くだけ。そんな景色を見て、彼は頭を抱えた。そしてしばらくいろいろなることを考えるうちに、彼はもつとも重大なことに気がつき、思わず叫んでいた。

「……オレ、一体誰だ!？」

そう、少年は自身が誰だかわからなかったのだ。名前はおるか、誕生日やどこから来たのか、目的すらもまったくわからない記憶喪失の状態で、彼は荒野に放り出されていた。

何か手がかりはないかときよるきよると見回すと、首の部分になにか引っかかっているのを感じた。白銀色の鍵をあしらったネックレスだった。裏返しにすると、『diluculum』という文字が刻まれていた。

(これが俺の名前か？ ディールールクム……って読むのか？ 長いな……)

自らの名という確証はなかったが、名前がないということにえもいわれぬ不安を感じた少年は、仮にそれを自分の名とすることにした。

ようやく立ち上がって着ている服から砂埃を叩き落とすと、ふと近くに獣のような影が見えることに気がついた。逆立った毛並みに、ぎらつく眼光。危なげな雰囲気をかもし出すその影は、じりじりとこちらににじり寄ってきていた。

「これって、もしかや人生のピンチ？」

砂漠狼と呼ばれる種類の狼が居る。鋭く逆立つ赤茶けた毛並みに、

ごつごつとした巨体。それでいてすばやさ失わない個体は、過酷な状況を生き延びてきたことを瞳にあらわしている。少年が対峙したのはそれであった。

今にも飛び掛らんとする砂漠狼から逃げようと、少年はうつすらと瞳に涙をためながら、赤い砂に足を取られつつも走り始める。しかし距離はすぐに縮まってしまい、獣特有のにおいと荒い呼吸が近づいてくることに体が戦慄を覚え、足がうまく動かない。

ああ、追いつかれる。そう思った瞬間。

「『きらめく光、炸裂せん』！」

凜とした少女の声が響いたかと思うと、目の前で閃光が炸裂し、鮮血が飛び散った。瞬きをして確認すると、砂漠狼は四肢と内臓を辺りに飛び散らせて息絶えていた。しかし、ざあっと強い風が吹くと、その姿は灰となって砂漠の砂と混じってしまった。

声の主は空中に浮いていた。といっても、翼があるわけではなく、美しい装飾のついた箒に跨っていた。少女はゆっくりと降りてくると、少年の前に降り立った。

「……平気？」

魔法が何かで救ってくれたのだろうか。眼前の少女は腰の抜けている少年の手を引っ張りあげると、青い瞳を細めて微笑んだ。彼女は右手で箒を持ち、柄の先端を地面について少しだけ体重をかけていた。

「えっと、ありがとう。助かった。オレはデイルー……あーっと、デイル！」

名乗り上げるとき、少年はネックレスに刻まれていた名前を略し、自らも把握しやすいようにした。

「そう、デイル。無事でよかった。私は『魔女』よ」

「……『魔女』？」

通常ならば名前を名乗る状況で、あえて彼女は名ではなく称号を名乗った。何を意味するのかデイルにはわからなかったが、とりあえず少女が普通の人間でないことは了解した。

「ええ。私のことはそう呼んで」

長い黒髪を風になびかせながら、魔女と名乗った人物は不敵に微笑んだ。荒野の西風がよく似合う人だ、とデイルは胸中で思った。

魔女はほんの数瞬、遠くのほうを見つめていた。が、やがて何かを察知したのか、箒に跨ると険しい表情をしながらデイルに向かって、言った。

「私はもういくわ。ええと、砂漠狼に気をつけて。……機会があったらまた会いましょ」

聞きたいことは山ほどあったが、彼女の瞳はそれを是と訴えてはいなかった。ゆえに、急いで離れようとする彼女を、デイルは笑顔で見送った。また会えることを信じて、にっこりと微笑んだ。

「ああ、またな！」

魔女はふわりと宙に浮かぶと、高く高く空へ向かって飛んでいってしまった。少年は動悸の治まらない胸を抑えながら、荒野の辺境で立ち尽くしていた。

## 第二話 二人の騎士

ふらふらと魔女が去った方向に歩き続けていると、なにやら荘厳な一行と出くわした。重そうな甲冑を装備した、乾き暑苦しい荒野では地獄なのではないかと思しき一団は、だんだんとこちらに近づいてきていた。大多数が馬に騎乗していたため、どうやら騎士団なのだろう。

デイルの姿を確認したのだろうか、一人の騎士が後ろから馬を走らせ寄ってくる。白く毛並みのつややかな馬の足音が、リズムカルに鳴らされた。

「この地区は民間人の立ち入りは禁止されている！ 名前と所属国を述べる。さもなければ連行し、酷い目にあわせるぞ」

声の質からして同年代ほどの男だろう。デイルはそう予測を立て、あえて軽い口調で話しかけた。

「えっとオレ……記憶喪失で……」

「……記憶喪失？ 本当か？」

「嘘ついてどうするんですか」

いぶかしむ騎士にむかって、きらきらとした視線を向ける。が、信憑性が足りないと思われるのだろう。騎乗したまま、こちらに刃を向けてきた。

「もしや『魔女』の使い魔か？」

「だったら、さっき一緒に連れていってくれたはずだぜ!？」

連れて行って欲しかったんだろうか、と自分の発言に疑問を持ったデイルだった。騎士はというと、その言葉を聴いて黙り込んでしまふ。なにかまずいことでも言ったか？ と不安になるデイルだったが、それは杞憂に終わった。

「キリル。悪いやつじゃなさそうだが、そいつは」

背後から声がかかったかと思うと、眼前の人物同じ甲冑をまとった騎士が一人増えていた。ただし、頭部の甲冑をその騎士は取って

おり、短い金髪があらわになっていた。デイルを見つめる瞳は美しい翡翠色であり、顔立ちは幼く、いくぶん整っていた。

「脅かして悪かったな、少年。こんな場所で立ち話もなんだから、ちよつとついてきてくれねー？」

とくに否定する要素もなく、逆にこの暑苦しい場所から抜け出したかった少年は、ぶんぶんと勢いよく首を縦に振った。

童顔の騎士の名はセルゲイ・スロフと言った。物騒な物言いをしていた先ほどの騎士はキリル・カレーリンという名で、騎士団長だという。デイルは自分の名と、記憶喪失ということなどをつたない口調で語る。

「にわかには信じがたいが……。何か怪しげなそぶりを見せたら即首をはねてやるからな」

眉間にしわを寄せ、ぶつきらぼうにそう告げると、キリルはだんまりになってしまった。美しいかんばせがゆがめられるのを、セルゲイがにやにやと見つめる。

「まあ、そういうなって、キール君？ それで、デイル。なんかわかんねえことある？ よかったら教えてやろうか？」

「セリョージャ、お前自分の立場をわかってんのか？ ……機密事項をばらした場合、そつこく打ち首だかな」

「オレを打ち首？ できんのかよ」

会話の内容は物騒だが、二人の表情から余裕が消えないことから、デイルは二人の仲のよさを推測した。年のころは大体同じくらいだろう。若干セルゲイのほうが若く見えるが、それは彼が童顔である所為だろう。軽口をたたきあい、あだ名で呼び合う二人に若干緊張しながらデイルは口を開く。

「……あの、ここはそもそもどこですか？ 地理がすっぱぬけて何にもわかんないんですが」

デイルが把握している情報は、少ないがいくつかあった。ひとつは物質の名前。砂がたくさん集まっているのが砂漠ということはあるのだ。ふたつめに物体の使用法。羽ペンをインクに浸して文字を綴る事もできる。そして最後に、やらねばならぬ自身の使命。それは漠然としていてはつきりとはしていなかった。けれど、デイルは使命に沿って生きねばならない事を義務のように感じていた。

「ああ、ここはズイムリアから西に行った、ウィンディアとの中間地点。通称『セティス砂漠』っていうんだ。ちなみにこのテントは一応避難所なんだけどな」

テントは複数建てられており、そのうちの一つにデイルとセルゲイ、そしてキリルが居た。ほかの騎士たちは各々別のテントで待機しているようだ。

「その……ズイムリアとかって名前がまずわかんないんですけど」「そっか、悪かったな。まず、この世界には四つ大きな国がある。それぞれ東西南北に位置していて、俺たちの国がズイムリア、北方の国だ。周りを山に囲まれた、雪の多い土地。ちなみに、魔女はそこから逃げていったんだ」

険しい山岳地帯にもかかわらず、ズイムリアは豊かであった。彼らの国は土に恵まれており、鉱物の発掘が盛んだという。また、わずかな春でも取れる植物や、寒冷に強い穀物のおかげで、人々は飢えずにすんでいるという。

「そうだ、なんであなたたちは魔女を追ってたんですか？」

自分を助けた後、逃げるように飛び去っていった少女を思い出しながら、デイルは言った。なにか悪事でも仕出かしたのだろうか。それにしても、何処か中途半端さの残る探し方のような気がして、デイルはえもいわれぬ違和感を覚えていた。

「魔女だから追ってたんだよ」

「……なぜぞ？」

セルゲイの言葉に首を傾げるデイルに対して、しかしキリルは重々しくつぶやいた。

「いや、事実そうなのだ。我らは魔女を追わなくてはいけない。魔女は排斥しなくてはならない。そして、俺たちは可及的速やかに魔女を火刑に処さねばならん」

「どうして？」

そういうと、おもむろに甲冑の頭部をはずす。無造作に伸びた茶色い髪の毛が汗ばんでいたが、精悍な顔立ちはまっすぐにディルを見据えていた。

「ディル。魔女をどう思う？」

琥珀色の瞳で見つめられ、ディルはどぎまぎと挙動不審になる。

あちこちへ視線をめぐらせ、やがて戸惑いながらも返事をした。

「え？ えーっと……、そんなに悪いやつって感じはしなかったんだ。火刑って、やりすぎじゃないのか？」

吸い込まれそうなほどに美しい青い目に、つややかな黒髪もきれいだっただが少年がなによりも気になったのは、不敵な笑みとは対照的な、哀しさを湛える瞳だった。本当に悪い存在が、そのような表情をするだろうか？ ディルはどうしても、魔女が彼らに追われるだけの悪事をしでかしたとは思えなかった。

「そうか。……だがな、魔女は王子を殺したのだ」

ディルの答えを聞いたキリルは、唇の端を軽く噛み、ぼそりと言う。それはさながら、思い出したくない過去をはき捨てるような口調だった。

「王子？ ズイムリアのか？」

「そう。そして隣国の皇子も巻き添えに殺した。国で一番高い塔の上に、今も王子の死体は残っている。王子は誰からも愛されていた。皇子もかなり人気があった。……彼らを魔女が殺した。故に、諸国民は誰しも、魔女を殺したがっているんだよ」

キリルの言葉は、ディルの中でぐるぐると渦巻いた。殺した。王子を。誰が？ 魔女が。瞬間、フラッシュバックのようにディルの中に映像の洪水がなだれ込んできた。

『にくい、憎い憎い憎い！』 『死んでしまえ、呪われた魔女め！』  
『燃やせ、燃やせ！ 灰にしる！』 『気持ち悪い』 『吐き気がする』  
『はじめから存在していなければよかったのに』 『王子を返せ！』  
『皇子を返せ！』 『ふざけるな、化け物が！』 『異端を排斥しろ！』  
『黒き魔女め！』 『殺してやりたい！』 『殺せ』 『殺せ殺せ』 『殺  
せ殺せ殺せ』 『殺せ殺せ殺せ殺せ』 ！』

憎悪と悲鳴、狂気に満ち溢れた民衆の怒声が、デイルの中で木霊する。魔女に対する怨念が積もり積もった声が反響し、頭を揺らす。デイルはおもわず屈み込むと、眉間にしわを寄せながらじつと声を聞いていく。まともに聞いては正気を失うだろうが、なぜかその声を聞き逃してはいけないうちに思われたのだ。

「お、おい？ デイル……？」

セルゲイが駆け寄ってきて、肩をたたいているのがわかった。だが、どこかその行為が遠く離れた場所で行われているような、自分に向けてのものではないような奇妙な感覚。どこか現実離れた様子だと、デイルは冷静にそう考えるのだった。

そんなデイルの様子をどう思ったのか、キリルは深く溜息をついた後、苦々しく言葉を吐き出すのだった。

「だから、あの魔女にかかわると碌な目にあわん。選択を誤るな俺の様に」

琥珀の瞳は、暗く、黒く。重たげな感情すべてをそこへ詰め込んだかのように、キリルの表情は晴れなかった。

### 第三話 少女達の舞う夜

「なんで、キリルさんはあんな事言っただんですかね。『選択を誤るな』って」

頭をかしげながら、デイルはつぶやく。彼は昔、何を誤り、何を違えてしまったのかが気になったのだ。

「教えてやるうか？」

「お願いします」

キリルが苦渋に満ちた表情を浮かべながら、即席のテントから出て行った後、セルゲイはこっそりとデイルに話しかけた。そのときにはもう、先ほどのような奇妙な誰かの感情が波のように押し寄せて来る。感覚はなくなっていたため、デイルは一度深呼吸して、彼の話に耳を傾ける。

「キールはな、昔、魔女のことが好きだったんだ」

「へー。……って、嘘お!？」

目を白黒させるデイルを面白がるように、セルゲイはニヤニヤと笑いながら続ける。

「本当だよ。だってオレ達は、魔女と友達だったからな。……いや、王命さえなけりゃ、今も友達なんだがな」

幼馴染だったんだよ、とセルゲイは寂しげに呟く。本当に仲がよかったんだらうなとデイルは考え、ぽつりと湧いた疑問を口にした。「王命って？」

「『魔女を異端視せよ』ってね。まあ、外交とかもあるから、大方あんなことを仕出かした魔女をかばえないって理由だらうがな。あ、これ秘密な。ばれるとセリョージャに首切られちまう」

肩をすくめながら、翡翠の瞳を片方はちりと閉じて、セルゲイはウィンクしてみた。その姿があんまりにも似合っていて、デイルは思わず微笑んだ。

「兎角、魔女の所為であいつは、あんなにも仕事に執着するように

なっちまっただよ。仕方のない部分も多々あったが……。だが、腑に落ちない部分もある。何故、魔女があんなことを仕出かしたのか、いまだにわからないんだ。だから、デイル。もしお前が魔女に会ったら、理由を尋ねてくれないか。』どうして王子を殺したんだ』  
って」

「ああ、わかった」

約束な、と小さく呟いて、セルゲイとデイルはにやりと笑いあった。さながら、旧知の友人のように。

長居もよくないと思い、手を振って騎士たちと別れた後、デイルは魔女の後を追うように西へ西へと進んでいった。乾いた風はやはり強かった。少々くじけそうになりながらも、砂塵を掻き分け歩き続ける。ふと目に入りかけた砂を風が凪いだ時に払うと、大きな岩の向こうに、ぽつぽつと集落の明りが見えた。

セルゲイの言葉通りならば、あの集落から先が西の国ウィンディアだろう。だんだんと新緑が増え始め、踏みしめている土の感触が変化してきた。当ても無いままさまよるのが若干はばかられたため、当面の目的を魔女に会うことにしながら、デイルは軽い足取りで荒野を進んだ。

だんだんと家々が近づいてくる中、ほんの少しだけ休憩の為に立ち止まった。体力は先ほどのテントで少しだけ回復したため、まだ動いていられそうだった。既に日は沈み、夜空には煌々と満月が輝いている。濃紺の空に覆われた世界を眺めると、一瞬、月を影がさえぎった。夜空を悲鳴が劈くと、影は一直線にデイルの元へと落下してきた。

「きゃああああああつ!？」

それは、美しい少女の形をしていた。波打つ金色の髪、透き通るような白い肌。しかし彼女の背からは、禍々しく黒い、蝙蝠のような翼が生えていた。彼女は地上に追突する寸前その両翼で身体のパ

ランスを整え、追いかけてきたもう一人の少女と対峙する。

「今日こそ冥府に来てもらうつスよ、リリム・ド・ラ・ファイエット！」

灰色のローブに包まれ、目を隠した少女が叫ぶ。ばさばさと羽ばたく翼の色もまた灰色であり、大きな鎌を手にしていた。デイルは近くにあつた岩の裏に隠れ、二人の様子を見ることにした。

「断固としてお断りだわあ。誰があんな変態冥王の所有物になるものですか。それに、私はまだ死ねないのよお！」

フリルのたつぷりあしらわれたゴシッククロリイタを、彼女の黒い羽から生じた風が、ふわりと舞わせる。

「あんたも十分変態ツスよ！ さあ、おとなしく狩られる吸血鬼。

『メメント・モリ部隊、ソフィアが希う。彼の者を断罪する力を』  
「！」

呪文らしき言葉が詠唱された後、鈍色だった鎌が白銀色に輝き始めた。神聖な輝きは月明かりを受けてその光を増し、吸血鬼と呼ばれた少女は眩しそうに目を細める。鎌を閃かせると、その光は形をとって、彼女の両手両足を拘束する。巨大な魔法陣が地面に展開され、デイルの体もその中へと入るほどだった。

「ちつ……。『断罪申請』なんて、姑息な手段を使うわねえ……。肢体の自由を奪うのは反則じゃなくて？」

「往生際が悪いほうがよくないっスからね。それに、世界に不死者が増えることを、冥王陛下はよくお思いになってないんで」

拘束されたまま、観念したように吸血鬼はうな垂れる。どうしたのかデイルが気になって、彼女のほうを覗き込もうとしたとき、死神は鎌を一閃した。風の斬れる音が響く中、灰色の翼を持った少女は高らかに叫んだ。

「いざ開かん、冥府の扉！」

意識が白く白く、フェードアウトしていくのを、まるで他人事のように感じながらデイルは気を失った。

体が揺さぶられているのだろうか。デイルはそつと目を開ける。  
「起きた？」

「あ。さっきの人」

がばりを上体を起こすと、肩の辺りが軋む様な痛みを訴える。ど  
うやらぶついたらしい。周囲を見渡すと、鍾乳洞のような薄暗い場  
所であることが把握できた。

「『断罪申請』があつて逃げないなんて、貴方正気なのう？ それ  
にあの砂漠は立ち入り禁止だから人間はいないと思つてたわよ、あ  
の死神」

ぷくりとほほを膨らませながら、眼前の少女はデイルに言った。

美しい海の色をした瞳が特徴的な、端正な貌だ。きらきらと光り輝  
く金色の髪は緩く波打ち、闇の中でもつややかさを失わなかった。

「いや、オレ、何にも知らなくて。……えーつと、あなたは？」

「さっきの話聞いてたでしょ。私はリリム。俗に言う吸血鬼つてや  
つね」

「吸血鬼つていうと、血を吸うアレですか？」

「まあねえ。血がご飯なんだから、しょうがないでしょ。……軽蔑  
した？」

「いいえ」

哀しそうなまなざしを向けられて、とっさにデイルは首を横に振  
った。記憶には無いが、知識としてはなぜか知っていた。吸血鬼。  
ヴァンパイアともドラキュラとも呼ばれる魔族で、生ける者の血を  
吸つて生きる密やかな種族。美しい貌を持つものが多いが、その大  
半が百の年を超えているという。

「オレは、デイル。記憶喪失みたいなんだ」

「へえ、難儀なことねえ。まあ、半分私のせいで連れて来ちゃった  
みたいだし、できることがあれば協力してあげるわ」

鼻を鳴らしながらも親切な態度を取る吸血鬼に対し、デイルは少  
し好感を覚える。意外といい人かもしれないという言葉は、胸中に

とどめたが。

「ありがとう。……ところで、ここは？」

「死神がつれてくるんだから、冥府でしょうねえ」

冥府。死者たちの魂が存在する世界であり、彼らが生前に行った所業を裁かれる場所だ。デイルは唐突にその知識が脳内にながれこんでくるのを感じ、自身の知識に驚く。さきほどからの知識の量は、まるで異常に分厚い辞書が大量に内在しているような感覚だった。

「って、オレ、死んじゃったのか!？」

「いいえ、生者でも冥府には来られるわ。ただ、帰るのは難しいけれど」

「……前にも来た事があるような口ぶりですね」

「まあ、よく捕まるからねえ。抜け道くらい知らないと、現世に戻れなくなっちゃおうわよう。私まだ死ねないんだもん」

「そうなのか？」

ゴシックロリイタ特有の、ふわりとしたスカートの裾を摘みながら、リリムは晒う。先ほどの人間のような暖かい表情が消え、人形のような冷酷な表情でデイルを見据えた。

空虚にも、憎悪がこもっているようにも取れる表情で、ぽつりと呟く。

「殺さなくちゃいけない人がいるから」

ぞくり、と肌が粟立つのを感じた。暗い、暗いまなざしで、少女は笑みを湛え続ける。

瞳が紅く、光って見えた。

#### 第四話 冥府の王はかく語りき

沈黙が二人の間には続いていた。薄暗い洞窟の中を、黙ったまま歩いていることは怖かった。が、リリムに何かを尋ねることもまた、赦される雰囲気ではなかったからだ。

口を開いては、のどにひっかかった言葉を出せず。かわりにこぶしをぎゅっと握り締めるデイルに向かって、沈黙を破ったのはリリムの方だった。

「……来やがったわね」

「え、何が……？」

冷やりとした感触が左手首をつかんでいた。誰かの手だろうか、視線を落とせば異常に細く長い骨ばった手が、デイルを捕らえていた。

「う、うわああああっ!?　だ、誰だっ!？」

「温い。……またも生者を迷い込ませるとは、ソフィアの駄目さ加減には辟易するな」

デイルの手首をつかんだまま、その人物は黒いフードを頭からとった。先ほど見た死神よりも濃い紫色の瞳が、デイルをじっと見つめていた。跪いた青年の、銀色の長い髪がさらりと零れ落ちる。果然とデイルがその青年を見つめっていると、彼はおもむろにつかんだ手をぐいと手繰り寄せ、その手の甲に口付ける。

瞬間的に跳ね除け後ずさるデイルをみて、青年はクツクツと低い声で笑う。デイルは悪寒が途絶えず、真っ青になっていた。

「おや、少年だったか。あまりに可愛いから少女かと思ったよ」

「だからって、いきなり手にキスするやつが何処にいる!？」

「冥府に来たのは初めてだろう?　ククツ、なあに、挨拶代わりだよ」

驚愕のあまりに叫び、そして言葉を失ったデイルを後ろにかばうように、今度はリリムが一步前に出た。少女を一瞥したその青年は、

ニヤリと意地の悪そうな笑みを強くする。青と紫の瞳が交錯し、火花を散らす。

「久しぶりだな、リリム・ド・ラ・ファイエット。自ら俺のモノになりに来たのか？」

「あんたのこの駄目死神に、無理やり連れ去られて来たのよ。別に変態な冥王陛下にお会いしたかった訳じゃあ御座いませんわ。つていうか、あんたが呼んだんでしょ！？ 私を！」

冥府の王はその言葉を聞いて、リリムを鼻で嗤う。侮蔑か嘲笑かはわからないが、見下すような表情で吸血鬼を眺めた。気に食わないとばかりに吸血鬼もまた青年を睨み返し、ぎりぎり歯軋りさえしてみせる。

「まあ、貴様に用事があつたからな。しかし相変わらず口だけは立つな。フン、まあいい。貴様を裁くときは今ではないからな。わざわざあのおちこぼれを使ってまで、貴様を呼んだ用件は一つしかない。魔女は見つかったか？」

デイルは魔女という単語を聞いて、リリムの背後からぴくりと耳をそばだてた。何処へ行つてもこの話題だ。いったい、彼女は どうしてここまで人々の話題の中心にいるのだろう。

肩をすくめながら、ため息をひとつついてリリムは告げる。詩人のように滑らかに、歌うように言葉は吐き出された。

「いいえ、依然見つからず。あの子はね、風より軽やかに、水のようにしなやかに、火のように目をくらませ、大地の加護を受けて私の事を撒いた。一応偵察には自信があつた心算なんだけど、あの用心深さは尋常じゃないわね。まるで……、全ての生き物と接触を絶つてみたい」

それを聞いた冥府の王は、一瞬冷たい光を宿し、その後に哄笑を始めた。洞窟に笑い声が無数に反響し、どこから聞こえてくるかわからない不思議な響きとなっていた。

「冗長だ。無駄な言葉はいらん。結局貴様には見つけれなかったのだろう。……呆れたぞ、吸血鬼。折角、貴様に有益な情報を与え

ようと思っていたというに」

クツクツ、と低い声で笑う。しかし彼の瞳は笑ってはいなかった。居心地悪そうに顔をしかめ、沈黙するリリムを見かねて、デイルはそつと手を上げる。

「……あのう」

「何だ、少年」

「オレ、会いました。魔女に」

魔女、といったとたん、冥王の目つきが変わった。今までのどこか超然とした態度から、焦りを含む人間的な感情に変化した。

「……なんだと。彼女は、今何処に」

肩をがしりとつかまれ、冷たい汗が頬を伝うのを感じながら、デイルは言う。

「オレも追ってるんだ、魔女を。砂漠狼に襲われてたところを、あの子が助けてくれたんだ。それで、えーっと……『機会があったら、また会いましょう』って」

「く、クククツ、アハハハハッ！ 面白い、エメリナの奴、何処までも逃げ続ける心算か」

冥府の主は両手を高く上げながら、声高く笑う。黒髪の少女を思い浮かべて、彼女の残酷さを思い出して。そして、魔女の愛しさを再び感じて。そんな冥王に、デイルは聞き返した。

「エメリナ？」

「知らんのか、少年よ。魔女の名はエメリナという」

へえ、初めて知った。そう呟くと、勝ち誇ったようにニヤリと笑いかけてきた。ライバル意識を抱かれたのかなあ、とぼんやりデイルは思ったが、それが酷く瑣末なことに思えた。

「……しかしまあ、いいだろう。ならばこの世の果てまでも追い続けてやるう！ 我が魔女、世界に黄昏をもたらす災厄！ 俺から逃げられると思うなよ……！」

舌なめずりをして暗い微笑を浮かべる冥王を尻目に、リリムはまたで踵を返した。デイルはリリムの細い腕につかまれ、ぐいぐい

と引つ張られながらそのまま洞窟を後にした。  
冥府の王は、もうこちらを見ては居なかった。

「あの。リリム……さん」

洞窟を抜けた先は、紫色の空が広がる小高い丘だった。冷たい風がびゅうびゅうと吹いており、肌寒さはあったが、景観はよかった。満天の星空が覆っていたが、月はどこにも見えなかった。この先をずっといけば、地上へ出られる抜け道があるという。

「呼び捨てでかまわないわよう。なあに？」

黒い二つの羽をばたばたと羽ばたかせながら、リリムは青い瞳を細めた。金色の髪がふわりと靡いて、妖精のように美しかった。もっとも、デイルは妖精を間近で見た記憶がなかったため、知識としての意見だったが。

「リリムが殺したいのは、あの冥府の王のことか？ それとも、魔女？」

「どっちでもないわよ。もっともっと憎らしい奴。……それ以上は、秘密よ」

くすりと魅惑的に微笑んで、リリムはそつと呟いた。

「『だあれが殺した、駒鳥さん』、くすくすくす……」

「駒鳥？」

「あら、知らないのぉ？ マ・メール・ロワよう。古から伝承されてきた由来不明の詩で、これはその中の一遍。続きはね、『それは私と雀は言った』。まあ、まだ続きがあるんだけど」

一度言葉を区切り、満天の星を見上げる。深い溜息をついて、話を続けた。

「……私は駒鳥を殺した雀を殺すために生きてるの。それ以外に生きる価値なんてないわ、こんな永久とこしえの人生」

はき捨てるように言うリリムの瞳が、復讐に燃えているようにデイルは思った。彼女が雀とたとえた人物をとても憎んでいることも、

同時に察した。

「リリムは、永遠の命が嫌なのか？」

なんととはなしにデイルが訪ねると、リリムは激昂した様子ですつくと立ち上がった。拳を作った両手は怒りにふるぶると震えていて、眉間に寄せられた皺は深かった。

「あたりまえじゃない！ ……誰かを愛せど、そのたびに取り残される。永久をともに生きてくれる人も、ともに死んでくれる人も居ない。それどころか、愛した人は口々に『生きる』と言うのよ！ こんな、こんな人生……生きていたって……意味、ないわ」

いつものようなおちゃらけた口調が失せ、真剣に語る少女の瞳は涙に潤み、デイルはいつのまにか彼女の頭を軽く撫でていた。

「大丈夫、だよ。保証はできないけど、いい人が見つかる。そんな気がするぜ？」

「……同情はいらないわよ」

「同情じゃないぜ。……予感がする」

そんな気がする、で割り切ってしまうような、些細な予感だった。けれど、デイルにはどうしてもそれを無碍にする事はできなかった。

丘に吹く風が、ほんの少し柔らかくなった気がした。

## 第五話 現世へと至る道

小高い丘を降りて、リリムが抜け道と呼んでいる大きな穴の前までやってきた。この穴の中に入れば、現世に戻れるのだという。

穴の周りは赤土色のレンガで覆われていた。長い間使われていなかったのか、その周りには蔦が多い茂っていた。穴を覗き込むディルの傍らに立ったりリリムは、かさり、という物音に反応する。誰かがそばに来ている。滅多にヒトの寄り付かないこの場所に。

「誰っ!？」

気配のほうに飛び掛り、赤いマニキュアの塗られた長い爪でその気配の頸動脈辺りを的確に押さえる。小柄なその体は、リリムの爪の感覚を感じた瞬間に硬直したようだ。

「ひゃああああっ! い、いきなり爪を向けるな、吸血鬼っ! 怖いっば!」

そこにいたのは、リリムとディルを冥府へ招いたあの死神だった。

「……なんだあ、落ちこぼれの死神ちゃんじゃなあーい」

断罪申請をされたときと、まったく状況が逆転していた。灰色の髪その少女は、いまや身動きをとれず、青ざめた顔できよるきよるとあたりを見渡している。

どう料理してやるうか、という表情を浮かべながら、リリムは愉悅に顔を歪める。じゅるりと舌なめずりまでしていた。その音が聞こえたのか、小さく悲鳴をあげて死神は硬く目を閉じた。

「へ? 死神?」

ようやく事態に気がついたディルが振り返ると、ツーサイドテールに髪を結い上げた少女が、涙目でこちらに助けを求めている。薄紫色の瞳が、恐怖にうるうる潤んでいる。

「リリム、やりすぎじゃないか?」

「あら、ディルがそういうなら離してあげちゃおうかしらん」

ぱっとリリムが手を離すと、死神の少女は顔面から思い切り地面

にダイブして倒れこんだ。むくりと起き上がると、デイルの方にすばやくかけよって、きらきらとした瞳で手を握りながらありったけの感謝を述べる。

「た、助かったツス！ 鎌を持っていない無防備な死神に襲い掛かるなんて、魔族はやっぱ卑怯ツスよ！」

「あんた馬鹿じゃないのかしらあ？ 理性の欠落してる魔族わたしたちに論理が通じるともおもったのお？」

ふわふわと蝙蝠のような翼で中空に浮かびながら、足を組みかえるリリム。ふわりと黒いペチコートが揺れる。先ほど冥府の王に上から目線で物事を言われた腹いせなのか、ふんぞりかえってそういう姿はなかなかサディスティックだ。

「うぐぐ。か、完全に油断してたってメレディス陛下にばれたら、また叱られるツス……」

どうやら冥王の名はメレディスと言うようだった。死神は生クリーム色の上着のすそを握り締めながらうな垂れている。その姿は普通の少女といったところでなら差し支えなく、むしろ翼も鎌もない状態のその死神は、まったく持って死を司る要素がないように見えた。

「まあ、落ち着けて。で、その死神さんが何のようだよ？」

「は、話のわかるヒトが居て、幸せツス……。あたしの名前はソフィア。冥界魂回収機構第二部署『メメント・モリ』所属なんだ。死神、告死天使、アズラエルっていったらあたし達のことツス。以後、お見知り置きを、デイルークルムくん」

「何でオレの名前……」

「そりゃー、あたしが『メメント・モリ』の部署長だからツスよ。情報がいっぱい入るくらいにはえらいんだぞー！」

「まったくそうは見えないけれどねえ」

胡散臭そうに鼻で笑うリリムを、ソフィアはぎろりと睨み付けた。ほったたをぶくりと膨らませながら、死神はその言葉をスルーして話を続ける。

「むむ。まあ、変態吸血鬼は置いておくとして……。一言謝りに来たのさー」

「俺に？」

「うん。『生者を冥府に招くことがあつてはいけない』が、メレデイス陛下の決められた規則なんすけど、あたしの手違いでディルクも断罪申請の範囲に含めちゃったんだな」

「オレは別にいいよ。……でも、そんなこと言ったらリリムは？」

ディルクのいぶかしげな視線を受けて、リリムは自虐的に微笑んだ。にこり、と。笑って、そうして、歌うようにいう。

「だって私、死んでるもん」

どういう意味だ、と言う前に、ソフィアがそれを言わせなかった。強い意志のこもった紫色の瞳は、宝石のように煌いている。

「生きた魂が死んだ体にくくりつけられている。それが、魔族の定義ツス。体と魂の結びつきが弱いと、理性が欠落しちまうんです。

だから地上の人々をむやみやたらに襲わせないために、あたしたち死神が日夜働いてるんすよ。……リリムの体はもう死んでるから、何時だって冥府にこられるんツスよ。本当は、今すぐ魂ひっぺがして回収してコーキウトスにでも閉じ込めてやりたいくらいなんツスけどー」

「安心してよ。につくき雀を殺したら、きちんと死んであげるから」  
命の価値がわからなくなるような、あっけらかんとした会話に、ディルクは眩暈がした。死を簡単に取り扱いきすぎているような、しかしこの二人にはそれが似つかわしいような気がして、頭を抱える。

「そっぴや……お二人さん、お次は何処へ？」

「そっぴねえ。天使の居ないところがいいわ」

「得策ツスね。この穴を落ちれば、行きたい場所に行くことができるとスよ。ただし、一緒に行きたい人がいるなら、絶対に手を離しちゃいけないツスからね」

赤いレンガの前に立って、くると穴の周りを回りながらソフィアは説明した。蔦に引っかかりそうになると、小さくジャンプし

てそれをかわす。なかなかのバランス。

「わざわざありがとな、ソフィア」

「照れるツスよー。じゃあ、また。ディル、貴方に『運命の歯車』の加護がありますよう」

ディルが笑顔でソフィアに手を振ると、その反対側の腕を勢いよく引つ張って、リリムは穴へ飛び込んだ。

光がだんだんちいさくなり、二人は暗い穴を落ちていく。どこまでも、どこまでも、どこまでも……。

「どうか、彼がこの物語に幸福を与えてくれますように……」

上から二人をのぞいていたソフィアが、誰に言うともなくそう囁いた。遠くの方で、  
がちり、荘厳な音がした。

## 第六話 風の国の記憶

ふと気がつくと、暗い空間の中。デイルは独り、その中に浮いていた。辺りを見回しても、そこには何もなく。先ほどまで行動をともにしていたリリムの姿も見当たらない。

デイル。デイルークルム。わらわたちの希望の子。世界に幸せを運んでおくれ……。

優しい声が、その暗闇の中に響き渡る。どこか懐かしい、暖かいものだった。

「だれ、だ……？」

かすかに見えた声の主の姿は、幼子のようだった。

「デイル、デイルっ!？」

「うわあああっ! ……ああ、リリムか」

誰か リリム以外の人物の声だった に名前を呼ばれていたような気がしたが、目を覚ますとそれが誰だったのかまったく思い出せなかった。むくりと体を起こすと、頭から木の葉がぱさりと舞い落ちる。

「起きないから、焦ったじゃないのよう」

ぶくりとほほを膨らませながら言うリリムは、なんだかいつもよりも少女染みっていて可愛らしかった。もしも姉というものがいるのなら、こんな風なんだろうなとデイルはくすりと笑みをこぼした。

「ごめんな。心配かけた。……ところで、此処は？」

「願ったりかなったりね。あの門の向こうはウィンディア。魔法の生まれた国よ」

指をさしたほうを見やれば、簡素だが丈夫そうな門がどっしりと構えていた。魔法の生まれた国という言葉に、デイルは興味を引か

れた。あの哀しそうな瞳をした魔女の国。高鳴る胸を押さえつつ、好奇心でいっぱい顔をリリムにむける。吸血鬼のほうもにやりと笑って、地べたに座っているデイルの手をとった。

「さ、いきましょ。今日はウインディアの祝祭日だから、きつと出店がいっぱい出てるわよう！」

言われるままにリリムの後をついていく。道なりに歩いていくと、大きな門が目前に迫ってきていた。

「これは？」

「国境門。ここで入国手続きしないと普通の国は入れないの。……だけど、ウインディアは商業的な面を重視する国だから、チェックが甘々なのよねん　ま、そうでなくてもコネはいっぱいあるからすぐに入れちゃうんだけど」

うきうきしながら、軽い足取りで門のほうへ向かう。デイルはあわててその後を追う。ズィムリアの騎士団とは打って変わって、軽装を身にまとった門兵がリリムに近づいてくる。

「通行証を拝見します……っと、お嬢さん、魅力的だねえ」

「あらそう？　ありがと、門兵さん。……私、あいにく今通行証持ってないんです。どうしたらいいかしらん」

「え、ええ！？　どうすりゃいいって言われてもなあ」

頭をかきながら、紅潮した面持ちで、眼前の美しい少女にちらりと視線をむける。

「じゃ、こっそり通してくれたら……イイコトしてあげるわよう？」  
思い切りしなをつくって門兵に媚を売るリリム。青年はごくりと喉を鳴らして、妖しく近づくと美少女を見つめた。手でその陶器のようなすべらかな肌に触れようとしたところを、リリムはするりと身をかわして二、三步距離をとる。

「な・ん・て。冗談よ。これで通してくれるわよね？」

リリムは首から提げていたらしい、黒い百合の刻まれたアンティーク調のペンダントを門兵に見せる。みるみる表情を変えると、青年は急いで扉を開くための仕掛けを作動させた。

「さ、いきましょ。デイル」

あつけにとられていているデイルの腕をつかんで、すたすたと 青  
年にキスを投げることを忘れずに 大またで中へ入った。

「こんな簡単に入れて、大丈夫か？」

「大丈夫よ、問題ないわ。まあ、ほかの国じゃあ、こうは行かない  
かもしれないけど」

吸血鬼はネックレスをしまいながら、そう答える。さび付いて古  
ぼけたものだったが、なかなか高価そうなアクセサリーだったよ  
うに、少年にはみえた。

「とくに、グロース・ヴルカーン。あの帝国は無駄に身分チエック  
とか手荷物検査とか厳しいのよねえ。ま、今の感じを見て判るとお  
り、ウインディアは大分自由な国よ。何ていったって国王が居ない  
からねえ」

「王様が、いない？」

デイルは思わず聞き返していた。自分の知識の中では、王の居な  
い国など無い、というのが大前提だったからだ。もともと、他国を  
よく知らない状態なので、なんとも言い難いのだが。

「そう。議会が政を執りしきっている国なのう。その中で毎回国民  
投票で決まる議長に選ばれるのが、『旋風』の異名を持つリアノ・  
ダステイン。まあ、一応知り合いね」

「へえ……よく知ってるんだな」

「第二の故郷みたいなものだからねえ。無駄に詳しくなっちゃった  
のよう。……さて、右に見えるのが中央通りよ。みて、デイル！  
変なものがたくさんあるわよ！」

ぶんぶんと手を振るリリムが、冥界に居たときよりずっと子供っ  
ぽく振舞う。ふわりとひるがえるスカートが、彼女のテンションの  
高さを表しているようだった。

露店を覗き込んでみると、色とりどりのお菓子や奇妙な仮面、眩  
い宝石のレプリカ、黴と埃の匂いにする堆く詰まれた古本の山、か  
たかたと動き回る小さな踊る人形、骨董品の壺やアクセサリーなど、

さまざまなもの溢れかえっていた。

飾りつけは全て青と黒がふんだんにあしらわれたモールや、リボンだった。周囲の人間も、心なしかその二色を服装のどこかに取り入れている。

「なあ、青と黒の飾りつて、何か意味があるのか？」

「今日はね、この国で唯一の、王家の名残。『王制廃止日』」

「へえ！ なんだかっこいいな」

デイルの言葉に、リリムは少し哀しそうな顔をしながら頷く。広場から少し離れた木製のベンチに、二人は腰掛けた。

「……そうねえ。この国はもともと、他国と同じように王が政治を仕切っていた。けれど、長年の王制は汚職と腐敗を齎し、ウィンディアの民は困窮に苦しんでいた。やがて民は立ち上がり、革命を起こした。でもねえ、デイル。革命には犠牲が付き物なのよう。無血開城なんて、彼らの頭の中には無かった。『王の一族を殺し、この国に正義を取り戻すのだ！』　そう言っつて、城は落とされたわ。王や后は当然のこと、幼かった王女も殺されたというわねえ。民は自由と、議会制の政治を手に入れたわ。でも、さすがに王女のことには哀れまれたのかしら。漆黒の髪に、青い瞳のお姫様を偲んで、装飾に取り入れられたのが始まりだそうよ」

永きを生きるその少女は、まるでその瞬間を全て覚えているように、饒舌に語った。

「見て、きたのか？」

「さて、どうかしらねえ。……まあ、一ついえるのは、魔族は血に惹かれるってことね。流れた血の香りがすれば、本能がそこへ向かわせるわ」

吸血鬼は不老不死だ。戦や革命の際に、彼女達が現れてもおかしくはない。血に惹かれるうちに、歴史を、知られていないような事実を手繰ることになったのだろうか。

そこまで考えたとき、再びフラッシュバックのように、誰かの意識が脳裏に流れ込んできた。

「いやっ！ お父様、お母様……！」  
「……………絶対、絶対に赦さないわ！ 私を裏切つて、お父様とお母様を殺した貴方達を、絶対に赦さないわ！」  
「私の幸せを、返して……！」  
「たすけて……。」  
神でも悪魔でも、魔王でも冥王でも、天使でも死神でもいい！ 何でもするわ！ だから。だれか、私を……、たすけて……！」  
「赦さない！ 殺してやる、殺してやる殺してやる殺してやる！ こんな世界、呪われてしまえ！」

どこかで聞いた声。少女の絶叫が脳内を侵食してゆく。幸福を求め、血塗られ、運命に翻弄される姿がいくつもいくつも、次から次へと溢れ出していった。

記憶の洪水がやんだ時には、足元がふらついて、思わず少年はリムの肩に寄りかかった。と、支える手がぶるぶると震えていることに気がついた。

「リリム？ 今のが、見えたのか」

「ええ……。デイル、貴方一体何者なのよう？ 今のは……王女が消えた日の出来事よ？」

疑わしそうなまなざしで、リリムはデイルを見つめる。が、少年自身も何が起こったか把握していないため、二人の間には疑問が蟠る。

しかし答えは出ず、ただ、少年の首にかかっている銀色の鍵が、きらりと光を放っただけだった。

## 第七話 魔女への手がかり

ウインディアで一番大きな風車の塔があるのは、旧ウインディア城の傍ら。その最上階の窓辺で、黒髪の少女が頼杖をついていた。古に崩された城は遺跡となつて、今では鳶が絡みつく程に朽ちている。

城下を見下ろしながら、青い瞳は何かを求めるようにあるいは、何も求めていないのか　遠くへ視線をやった。ぼうつと薄水色の空を眺めていたところで、視界の端に銀色のきらめきが映る。

「あの輝き方は……白銀の鍵？」

少女が独り語散ると、それに答えるように胸元の鍵がきらりと光る。眩いそれは少年の形を象ると、弾けて散じる。

「ああ、ありや　ムネモシユネ」だな。どうすんだよ御主人？　今まで無に帰してきた真実、あいつが居たらぜえんぶ暴かれちまうぜ？」

頭の後ろで手を組みながら、ふわふわと宙に浮いたまま少年は気だるげに呟いた。髪は黄金に輝き、瞳は焰のように灼熱を湛えている。長すぎる黒衣の裾はよれ、襷褌と化しているところから、長期間使用されていることが見受けられた。

「そうね、レテ。……それならばそれで、運命の歯車の導きなんですよ。とにかく、今は先に進まなきゃ」

レテと呼ばれた少年は、魔女の言葉に微笑を返すと、再び金色の光を纏つて鍵の姿に戻る。中央に赤い宝石のついた、豪華な装飾の施されたそれを首にかけなおすと、魔女は城下を一瞥して、遙か遠くに思いを寄せた。

「……待っていて、王子」

会いたい人がいる、とリリムがデイルを連れて行ったのは、城と

は反対側にある箱のような建物だった。赤い煉瓦が詰まれたその建物は、比較的新しい造りなのだろう。城下の町から歩いてほど無い距離に佇む姿はしかし、違和感というものを感じさせない。

脇に備え付けられた金属板には、【議会議堂】という文字が深く刻まれていた。重たそうな鉄の扉に護られた、堅牢なつくり。リリムは番人と思しき青年に一言二言話しかけ、扉を開けてもらったようだった。

「リリムの会いたい人っていうのは、リアノって人なのか？」

「そうよう。私の遠い親戚。と言っても、彼女と知り合ったのはほんの十数年前だけどねえ。たびたび近況報告をするって、約束をしているの」

十数年をほんの、と言つてのける辺りに、彼女の生の永さを感じ取る。思わずデイルはため息をついた。一体リリムはどれくらい生きていくのだろうか。語ろうとはしないものの、やはり気になつてしまふのだった。

議会議堂の中は外よりもひんやりとした空気が漂つていて、廊下を歩いていて心地が良い。建物の中は大理石の敷かれたつくりで、華美にはなりすぎていないところに設計者の拘りを感じさせた。単純そうだが、美しい。

係のものに案内されなくても目的地を知つていふと言つことは、リリムはここに何度か来たことがあるのだろう。彼女の足取りには確固たる意志があつた。

このあたりかしら、と呟いて、おもむろに扉を開く。中にはいくつか椅子の並べられた円卓と、一つだけ豪華な赤い椅子。思わずデイルはベルベットの、手触りのよさを触つて確かめてみた。想像したよりもやわらかく、ネコの背中のようにだと思つてみると、リリムがいきなりそれにどつかと座り込んだ。デイルも続いて、テーブル越しのその反対側に座る。

ふわふわと巻かれた金髪を指でくるともてあそびながらどうやら彼女の癖なのだろう　デイルに向かって話しかける。

「あの子は齡二十七の若さにして、議長席の座を掠め取った切れ者よ。ま、見た目は単なるおばさんだけだね」

「誰がおばさんだ」

「いたっ」

リリムの頭を小突いたのは、不敵に微笑む妙齡の美人。赤に近い焦げ茶色の髪を頭でシニヨンにしてまとめ、緑色の双眸には銀縁の眼鏡がかかっている。深緑色のベルベット地に金色の刺繍が編みこまれたローブを着こんでおり、ぱっと見ただけでは熟練の魔導師のようだった。

「久方ぶりだな、リリム」

「そうねえ、リアノ。最後にあつたのは三ヶ月前かしら」

「三年前の間違いだらう？ それに、私を婆呼ばわりするなら貴女はどうなるんだ」

「私はー、永遠の十七歳だもん」

確かにそれは正しいのだろう。デイルは苦笑しながら、吸血鬼を見やる。きゃぴ、と自ら効果音を呟くリリムの姿に、リアノ・ダスティン議長は静かにため息をついた。見た目に合わず、男勝りな口調。だが、そこに違和感は感じられなかった。

そうしてリリムは、いくつか彼女に報告を始めた。デイルが聞いてもあまり理解できる内容ではなかったが、周辺諸国の動向や、冥府の様子、異常事態が無いかどうかを話しているようだった。

数十分間ほどたっただろうか。ぼんやりとしたまま、まどろみ始めるデイルは視線を感じて意識を覚醒させる。ふと、不思議そうな顔をしたリアノ議長と目が合った。

「こちらの少年は？ 貴女が誰かと行動を共にするなんて、珍しいじゃないか」

「ま、いろいろあつてね。この子はデイル。今はウィンディア見学のために連れ回してるの。 魔女を探すついでにね」

にまりと微笑みながらリリムが言つと、議長は目を見開いた。彼女も魔女の関係者なのだろうかとデイルは考える。

「……魔女、に。君は、彼女の知り合いかね？」

「まあ、そんなところですけど」

「そうか……。彼女を追うのなら、気をつけたほうがいい。魔女は様々な理由から、あらゆる者に狙われている。それは判っているだろう」

「は、はい」

冥府での冥王の態度を見れば、何とはなしに理解ができる。魔女を付狙うものは 全てがああではないだろうが みな危険人物であるのだろう。顔をしかめたりアノの眉間の皺が、全てを物語っていた。

「互いが互いの利益のために、彼女を追っている。他を排斥してでも、それを得ようとする輩ばかりだ。デイル、くれぐれも気をつけたまえ」

「いざとなったら私が護るから大丈夫よう」

うふふ、と言いなながら真紅の爪をひらひらと見せびらかす。道中に聞いたが、彼女の爪は伸縮自在で、武器の代わりにもなるのだという。それから、相手の血を吸えば、その相手を意のままに操ることも可能であるとか。デイルはすごいなと思いつつ、自分の無力さに落ち込む。

「オレが護ってあげたいのに」

そう思って、小さく呟く。ちらりとリリムのほうを見やれば、なぜか顔を真っ赤にしながらわたたと慌てていた。彼女らしくないと思つて、じつとその様子を見つめる。

「……………ば、馬鹿。私が護ってあげるって言ってるんだからおとなしく護られてなさいよう！」

そっぽを向いた彼女からは、そんな言葉が返ってきた。デイルは微妙に不服だったが、力の無い現在は足手まといになってしまうと思ひ、素直に頷いた。

「して、これからどうする」

ごほんと咳払いをして、リアノはそれた話題を戻す。ほんの少し

口元に笑みが浮かんでいたのは、錯覚だろうか。

「とりあえず私たち、魔女に会わなくちゃいけないのよねえ……。何か心当たりは無いかしらあ？」

「こちらにはそれほど情報は無いが……。ああ、そうだ。近々アクアレーネで旅芸人の一座が公演をすると聞いたが、ひよっとしたら現れるかもしれない」

アクアレーネ。その単語が、再び知識の渦へとデイルを誘った。大陸にある四つの国のうちの一つで、南方に位置する王国。その名の冠するとおり水を制し、水に制される優美な国であるようだ。若き女王が統べる国で、貴族制度が存在している。そこへいくためには、迷いの森という国境をまたぐ巨大な森を越えていかねばならないことも、知識は告げていた。

この奇妙な現象は、どうやら砂漠で騎士達に出会ったときに発生したあの頭痛から、ずっと続いている。知らないことであるはずものを、知識として既に蓄積されているのだから、気味が悪いと言えはそうだろう。だが、便利なのでデイルは特に気にしないようにしていた。今はもっと、この世界のことを知りたい。

「旅芸人？　なんでそんなところに？」

「魔女は魔力を集めているという噂がある。あの一座の歌姫は、たしか膨大な魔力を有していると聞いたぞ」

とりあえずは、その王国へ向かうことになりそうだった。話が済んだために、議会議堂の外へと連れられながら、他愛も無い談笑を繰り返しながらデイルは思う。彼女はよき統治者なのだろうと。国民への愛が、言葉の端々に感じられて、何故だかデイルは嬉しくなった。

最後に見送りに出されるとき、リアノはにこやかに微笑みながら言う。

「困ったことがあるなら、いつでも言うといい。……。なんだその目は」

「リアノ、お金、ちょうだい」

「……困った人だ、まったく」

上目遣いで青い瞳を潤ませるリリムに、ため息をつきながらも議  
会堂の奥へと戻る姿を見て、ディルとリリムはくすりと笑いあうの  
だった。

## 第八話 迷いの森の奥深く

「魔女がウィンディアに居たとの報告がありました」

黒髪の青年は、城の書齋にたたずむ、グロース・ヴルカーンの第一皇子に頭をたれた。抑揚の無い、無感情な声が部屋の中に響く。豪華な衣服を纏ったその皇子は、鮮血のような緋色の瞳でじっと部下を見つめる。銀髪がさらりと揺れ、彼は整った美しい顔に酷薄な笑みを浮かべた。

「そうか。魔女め、俺様にかけて呪いを解く心算はないようだな。

……ジャック」

「何でしょうか」

眼前の剣士と思しき青年もまた、皇子と同じ色の瞳で彼に向き直る。しかし剣士のほうが若干、くすんだ赤色をしていた。赤銅色と言うべきだろうか。徹底的に感情がそぎ落とされた、青年の虚ろな色の瞳を見た皇子は、満足気に鼻を鳴らす。剣士の服は黒く体に密着していて、さながら影を纏った暗殺者のような出で立ちだった。血鎧で、服の上から纏った銀の鎧の輝きが薄れている。

「魔女を、俺様のもとへ連れてくるがいい。だが、殺すな。生け捕りにしろ」

「承りました」

青年は踵を返し、すたすたと書齋を出て行く。残された皇子はにやにやと笑いながら、傍らに忍ばせてある透明な短剣を抜く。そうして恍惚とした表情で、そっと囁いた。

「早く来いよオ、魔女……。お前を殺すのは、俺様なんだからなア」

ウィンディアを離れたデルとリリムは、迷いの森へとやってきた。途中の露天で野宿や森の散策に必要な道具をあらかじめ買占め、

ここまで来るのに数日。しかし、迷いの森はそう簡単に抜けられないのだと道具屋の主人は言っていた。

リリムですら、迷いの森に対してはろくな評判がないとぶつぶつ文句を言う始末。そんなに危ないのか、とディルが首を傾げると、リリムは溜め息をつきながらうなだれた。

「あの森は……精神的にクるらしいのよね。知り合いがいったわ」  
がつくりと頂垂れて呟くも、既に森のほど近くまで来ていたため、今更引き下がるわけにはいかない。眼前に広がる巨大な森は、ディルに感動と好奇心を与えていたのだから。

鬱蒼と多い茂る木々はどこか陰鬱とした雰囲気醸し出していた。花はなく、刺々しい茨や、宿木の蔓がそこかしこにはびこっている。勇気を出して足を踏み入れる。暗緑色の木々が不気味な印象を与えていた。とりあえず歩みを進めていく。が、突然リリムが小さく悲鳴をあげた。

「きゃっ……！？ ディル、危ないわ、逃げ……！」  
何事かと振り向けば、既にリリムの姿は無かった。声が途切れるような不自然な消え方に、ディルは彼女の声のほうへと走る。

「リリムっ！？ おい、どこなんだよ!？」  
しかし探せども探せども、彼女の姿は掻き消えたように見当たらない。むしろ森の奥へと誘い込まれるようにディルは木々を分け入っていく。巨樹の根を乗り越え、だんだんと薄暗くなっていく森を一人で歩き回っていく。体力的に厳しさを感じ始めたころになってようやく、少し開けた場所が見えてきた。

瑠璃色を湛える湖の周囲に、やわらかな光が舞っている。ここだけは陽光がやわらかくさしこんでいて、先ほどの暗澹たる空気は消え去っていた。

「リリム……?」  
ここになら居るのではないかと、希望をこめて呼んでみても、やはり返事は無かった。絵画のような景色の中で、ディルの声が反響する。水辺にそっと座り込んで、湖を覗き込む。焦茶色の髪の毛が

ところどころくるりと跳ねた、橙色の瞳の少年がこちらをじつとぞき返している。

そして、傍らには少女の姿があった。

「ねー、キミ、なにしてるの？」

後ろから声を駆けてきた少女は小柄で、幼さを印象付ける顔立ちだった。亜麻色の髪を揺らして、小首をかしげるその髪には白い花飾りがついている。背中には虫のような、装飾された透明な羽が生えていた。落ち着いた色合いの民族調の服を纏っており、ぱっと見た感覚では十代前半くらいだろう。

「人探し、かな。長い金髪の女の子、見なかったか？」

「んー、ボクはみてないな。他の妖精たちに聞いてみよっか。何かわかるかも」

きらきらと輝く翡翠色の瞳を、舞い踊る光のほうへ向けて、近寄り言葉を交わす。どうやら妖精であると言ったことがわかると、ディルの頭に鈍痛が奔る。そして同時に、知識の流れ込んでくる感覚。

妖精族は月の加護を受けた種族。自然とともに生き、森や海から生じる濃い魔素<sup>マナ</sup>を得ており、基本的に寿命は人の数倍。めったに他種族の前に姿を現さず、ソムニウムの中では『迷いの森』付近でしか確認することはできないはずだ。

目をふっと開けると、いつのまにか眼前に少女が立っていた。目が合うと、にっこりと微笑まれて、おもわずつられて笑顔になる。

「そのお姉さん、吸血鬼なんだね。危ないんじゃないかって、みんなが捕まえちゃったみたい。ごめんね、ボクがそこまで案内するから、ついてきて！」

妖精はディルの手を引いて、木漏れ日の中を小走りに進んでいく。二人を囲むように、やわらかな丸い光がくるくると舞っていた。

つれられてきたのは、また光景の異なる場所だった。薄明かりの

中で、硝子細工で構築されたような建物が見えた。線の細い、薄紫や水色の混ざった色をしている幻想的な塔の前に、ひとりの女性が立っている。

「おかえりなさい、ニコラ」

「おかあさん！」

細い糸のようにさらさらと亜麻色の髪の毛が揺れる。ゆつたりとした淡い色の薄布をたくさん重ねたような服を纏った女性も、少女と同じ羽を持っていた。

「はじめましてですね、夜明けを導く者。あたくしの名はヴィヴィアナ。妖精たちを統べる王です。これは娘のニコラ。貴方が此処に来ることは、判っていましたよ　デイル」

「……え？　どうして、オレの名前、知ってるんですか」

妖精の王はアクアマリンの色をした瞳を細めるだけで、彼の質問に答えようとはしなかった。そのかわりにと、ゆっくり彼に近づいて、その薄茶色の髪の毛を撫でる。愛しい子供を慰めるような優しい手つきだった。

「運命の申し子。貴方に頼みたいことが、いくつかあるのです」

「オレに？」

「ええ。……デイル、この娘を、連れて行ってくれないかしら。理由は、いずれ判りますわ。どうしてもニコラを、彼らに奪われるわけにはいかないのです。あたくしたちの為にも、この子の為にも」  
「なんかよくわかんねえけど……。ま、いいぜ？　ただし、リリムを帰してくれ」

「構いませんよ。もう、あたくし達に害をなすことは出来ないですようから」

「それ、どういう意味だ？　……リリムに、何をした？」

その言葉に、低い声で唸る。眼前の妖精の柔和な微笑が、急に嘘くさく見えてデイルは眉根を寄せる。妖精王は悲しげな瞳で言葉を紡いだした。

「少し幻覚を見てもらいました。おそらく森を出るころには忘れる

ような物ですが。……でも、悪く思わないでくださいな。今はこれ以外に、あたくし達に自衛の術は残されていないのです」

そうして、すわりとした細い指を、ぱちん、と鳴らす。途端に視界がぐるぐると回転を始め、黒と白のコントラストがちかちかと明滅を繰り返す。吐き気と頭痛に襲われて、デイルは柔らかな草の上に倒れる。最後に見たのは、心配そうにこちらを気遣うニコラの瞳の色だった。

揺さ振られる感覚。少しだけ泣きそうな少女の声。目蓋をゆっくりと開けば、リリムの美しい瞳がそこにあった。

「デイルってば！」

が、見とれてまもなく、左の頬を平手で叩かれる。ばちり、とい音がかして、じくじくとそこが痛み始めた。

「うおおお！？ お、おお、リリムか。何だよ、吃驚させんなよ」「吃驚したのはこっちよ！ 森から出たらいきなりデイルが倒れるんですもの！ というか、倒れすぎなのよ！ デイルは！ ウインディアのときもそうだったじゃない」

少しだけ青い瞳に涙を溜めたリリムに飛びつかれ、デイルはほんの少し頬を赤くする。心なしかやわらかな胸が押し付けられているような気がしたが、どうやら彼女は気にしていないようだ。

「ボクは心配ないって説明したのに」

「だあれが、妖精なんかの説明を信じるのよお。どんな種族よりも悪戯好きでしょう？ テイル・オイレンシュピーゲル？」

「だからボクの名前はニコラなんだってばー。それに、悪戯なんてしないよ、ボク！」

「わかったわよオーレ・ルゲイエ」

「ぷうー！ ちゃんと名前でごんでよー」

駄々をこねる子供のように頬を膨らませるニコラと、鼻で笑うリ

リムの二人が対照的で、デイルは思わず苦笑を漏らす。ふと、ヴィアナの言っていた言葉が気になり、森の方へともう一度視線をやる。位置的にはウィンディアの反対側ということなのだろう。森の出口は心なしか、入り口よりも明るい雰囲気だった。

「結局、無理やり追い出された形かよ……。ま、抜けられたから結果オーライか？」

妖精王に言われたことは、いくつか気になる点があったが、元気そうなりリムを見ると、幻覚とやらに実害が無かったようで胸をなでおろす。彼女の言葉を確認するよりも、今はとにかく今は魔女を追いかねばならない。そして、妖精王の娘も護らなければ。デイルは体にまとわりつく木の葉や枯れ草を払って立ち上がった。

「そうね。ほら、いくわよ。デイルも。……………その、妖精も」「よろしくね」

「あ、ああ。よろしくたのむ。がんばって護るよ」

屈託の無い、純粹無垢な微笑を向けられて、思わずデイルは頭をかく。ニコラはえへへと笑って、人懐っこそうにリムの傍による。どうやらリムはニコラが苦手なようで、近づいてくる妖精を手でばたばたと拒絶するしぐさをする。が、妖精はなおもリムの傍に近寄ろうとするのだった。

そんな光景を見て、デイルはこぶしをぎゅっと握り締める。ニコラを護る力があるかどうかはわからない。しかし、出来る限りのことはしよう。そう心に誓って、小高い丘を下り始める。

こうして、不機嫌な吸血鬼と、ご機嫌な妖精を伴う奇妙な一行は、水の都アクアレーネへ向かうのだった。

## 第九話 古からの神話

「貴女、願いがあるのね」

アクアレーネの首都、ルサルカ。その中央に位置する噴水広場の外れに、歌姫は佇んでいた。赤い衣装を纏ったまま、小声で歌を口ずさむ彼女の前に、小柄な影が差す。

「魔女、ね。叶えてくれるというの？」

黒いとんがり帽子を被った、長い黒髪の少女が、箒を片手に立っていた。首からは、赤い宝石のついた黄金の鍵を下げている。若い、と歌姫は思った。まだ成人していない、年端もいかぬ少女が、大陸全土から憎まれる魔女だと思つと、なにやら不思議な気持ちになる。「対価として、貴女の一番大切なものをもらうけれど」

「私の、一番大切な……」

歌姫は逡巡する。自分の一番大切なもの。間違はなくそれは歌声だった。仕事を続けていくのには、決して失つてはいけないもの。しかし、彼女の願いはそれすらも天秤ばかりにかけるに値していた。もとより、叶えるために歌を捨て去るつもりですら居たのだ。願つたりかなくなったりね、と笑う。

「いいわ。それでも構わない」

「契約成立ね」

頷く歌姫を見て、ふっ、と薄く笑う魔女。その笑みは、どこか自虐的な色を含んでいるように見えた。

アクアレーネの国境門付近。通行許可証を得るために長い行列に並んでいる間、リリムはデイルとニコラの質問責めにあっていた。

デイルが記憶喪失なのはリリムも理解をしてはいたものの、ニコラの世間知らずについては完全に予想外だったらしい。何にも知ら

ない無邪気な妖精に噛み砕いて説明することになって、彼女は頭を抱えていた。迷いの森から出たことが無いと言い切ったニコラは、尚も見るものすべてに目を輝かせている。全く何も知らないわけではないのだろうが、ニコラはただ微笑むばかりで詳しくはわからない。

質問の内容は多岐に渡った。まず、ディルから、ソムニウムの正確な地理について。リリムは、四大国家がそれぞれ東西南北に配置された地図を即席で地面に書き、現在地であるアクアレーネの位置を枝で指し示した。南の国特有の温暖な気候で、首都ルサルカは水の都とも呼ばれている。水路が幾重にも張り巡らされた構造は、水が絶対に氾濫しないことが保証されているこの国だからこそ出来た物だという。

さらに、他国の名前をそこに書き連ねていく。北はズィムリア、西はウインディア、そして東にグロース＝ヴルカーン。

「ズィムリアは魔女が殺した王子のいた国よう」

「知ってる。オレ、あの国の騎士団に会ったことがあるしな」

「そう、なら話が早く済むわ。ズィムリアとアクアレーネは王が統治する王国よ。対して、ウインディアは議会制を導入した共和国。

そして、東の大国、グロース＝ヴルカーン。唯一帝国を名乗っているわ」

「帝国ってことは、すっごく大きいってこと？」

ニコラがきらきらと目を輝かせながらリリムをみつめる。リリムはどつやらあきらめたらしく、子供をなだめる大人のように 事実そうなのであるが ニコラの言葉に首肯する。翼をしまいこんだ二人は、ぱつと見たところは姉妹のようにも見えた。事実、翼さえなければ見た目は余り人間と大差はなかった。

「ええ。あの国とはなるべく関わりたくないわねえ。特に第一皇子は」

「なんか危ない奴だったりするの？」

「表向きには美男子で性格もいいってことになってるらしいけど、

本性は残酷なエゴイストだって聞いてるわね」

聞いている、とはいったいどこからの情報なのだろうか。と、改めてデイルはリリムの情報網の広さに嘆息した。

その時、滞っていた列の流れが動き始める。みるみるうちに進む人々に遅れずについていくと、見事な彫刻の門が近づく。刻まれているのは、左右に配置された二人の男の横顔と、中央の一人の美しい女の像だった。

「あれは……？」

「この世界を創造したって言われてる神々の像よう。右の男が太陽神ソル、左の男が闇神ウエスペル。そして、真ん中の女が月神ルーナ。……まあ、神話についてはまた後でねえ。ほらデイル、そろそろ手続きだわ」

ああ、と生返事を返しながらも、デイルはその彫像に見とれていた。三柱の神。しかし、彼の記憶は告げていた。何か足りない、と。

アクアレーネに無事入国し、国境付近の町で宿をとった三人は、ひとまず荷物を置いてくつろいでいた。明朝にでも、馬車で首都へ向かうための算段を整えると、リリムは部屋に置いてあったティーカップをもってきた。簡素な石造りの調理場に鉄製のケトルを置いて、竈に火をつける。マッチの擦れる音がして、灯火が薪の上に宿る。

ニコラはその間に、腰に巻いていた革製のウエストポーチから赤い木の実を取り出す。ベッドのうえで横になりながら、もぐもぐと食べている。夕飯にはまだ早く、しかしティータイムにしては少し遅い。デイルの知識はそう告げていた。

デイルは部屋の窓際に置かれた、簡素な造りの木の椅子に腰掛けていた。夕暮れの太陽が、低く軒を連ねる家々を赤く染めていく。

太陽神の彫像を連想したデイルは、あの時感じた違和感の正体を探ろうと、目を閉じる。

「足りていない。だがそれが何かはわからない。デイルは自分の知識に問いかける。目蓋の裏の闇に、小さな灯りがともる。長いプラチナゴールドの髪が、輝く金の瞳が映る。彼女はこちらに手を伸ばして何かを叫んでいる。が、聞き取れない。あと少し、というところで、その姿が薄れて消えた。

「デイル、リリムちゃんかね、紅茶淹れたからおいでって」

ニコラの声に招かれ、リリムの許へ向かう。部屋の中央のテーブルの、先ほど用意していたティーカップの中に、赤い液体が揺らめいていた。ほんのり立ち上る香りは甘く、薔薇を連想させた。

「それで、さっきの続きを話せばいいのぉ？ シルフィード」

「だからニコラだってばー。うん、ボク、神様のお話が知りたいなあんまり聞いたことないし」

細い指でカップの摘みを持ち上げたりリリムは紅茶を一口啜り、流暢に語り始めた。

「昔々、この世界には何も無かったわ。ソムニウムを形作ったのは主神デウス。彼は太陽と闇を司る神を作り出し、二柱の神に世界をおさめさせた。でも、闇の神ウエスペルの力は余りにも強大で、太陽神ソルとバランスがとれないと思ったデウスは、光を司る二人の女神をつくるのよ。片方は月の女神ルーナ。もう片方は、星の女神ステルラ。ようやく力の釣り合いのとれた神々は、世界に生き物を造り始めるわ。ソルは天使を、ルーナは精霊を、ステルラは人間を。ウエスペルはそれらの生き物を闇に染めて、魔族をつくったと言われているわ。だから、ウエスペルは嫌われ者なの」

「さっき、そのステルラって神はいなかったぞ」

ステルラ。ひよつとして彼女が、デイルの思った違和感なのだろうか。そうおもってリリムに尋ねる。しかし彼女はひらひらと手を振って、相手にしようとはしなかった。

「まあ聞きなさい。じきにわかるわ。そして世界の管理を四神に任

せて、デウスは眠りについた。約束の地と呼ばれるそこは、真の意味での楽園なんですって。……さて、神々の作り出した生き物は、初めはみな仲良く暮らしてみたいね。あらゆる神の加護を、全ての生き物が得られていた。でもある時、人間は他の種族に反旗を翻す。なぜだかは知らないけど。とにかく人間は、自分達と種族の違うものを畏怖し、迫害するようになった。そうして多民族と人間の間に戦争が起こるの。でも、月の女神ルーナが自分の身を投げ打って、その戦いを止めさせたの。そしてステルラは人間の管理責任を負わされて、その力を奪われたんですって」

神が力を奪われると言うことは、信仰力がなくなるということ。存在を忘れられた神は、徐々に力を失って、今では大陸全土でも、ステルラの名を出す存在はほとんど居ないと言う。

「その戦争の後、神々は自分の創った種族にのみ力を与えるようになったの。今まで大陸全土に居た妖精が、自然の濃い場所にしかいられなくなったのは、ルーナの加護が得られないからよ。そして魔族は、戦争で仲違いしたソルとウエスペルのおかげで、日の光には滅法弱い奴が多いってわけよ」

妙に現実味のある神話だと、少年はリリムの語った物語を聞いて思った。おもむろに、妖精が無邪気に微笑んで尋ねる。

「ねえねえ、リリムちゃんは、どうして吸血鬼なのに日光に当たれるの？」

彼女の問いに、デイルが目を見開いた。そうだ、彼女は吸血鬼。闇に生きる種族の筈なのに、何故自分の手を引いて、陽光のもとを歩いて来られたのか？ そして、何故自分は今までそれに疑問を持たなかった？ ぐるぐると回る思考を、リリムの声が遮った。

「私が太陽に害されないのはね、呪いなのよ。私が殺してやりたい奴がかけた呪い」

彼女の目が妖しく輝く。例の雀と呼んでいた人の事だろうな、とデイルは思った。太陽を克服できるならば、彼女達にとっては得なのではないかと思う。しかし、口が避けてもそんなことは言えな

った。

「……まあ、私の昔話はいいわ。とにかく、明日は歌姫の所に行くわよ！」

飲み終えた紅茶を受け皿に置くと、足取り軽く扉へ向かう。食料を調達すると言い残し、手をひらひらと振りながら出ていった。

はあ、と溜め息をついたデイルに、ニコラが不思議そうな顔をして尋ねる。透き通った瞳と目があつて、いろいろな物が見透かされているような気持ちになった。

「さつき、びっくりしてたでしょ。リリムちゃんのこと、どーして、デイルは変におもわなかつたの？」

「どうして、って……」

小首を傾げながら言われた問い。それを聞いて、デイルは自身に問いかける。改めて考えれば奇妙な話だった。吸血鬼の弱点は知っている。だが、リリムが日光に当たっても苦しむ様子がないのを、デイルは当然のものだととらえていた。リリムという事実を、ありのままに受け入れていたのだ。

「そういうもんじゃ、ないんだよな」

「わかんない。でも、神話はしらなかつたけど、ボクは小さい頃から何回も言われてるよ。魔族は太陽に嫌われてるって。デイルは？」

「オレは、記憶喪失だから。知識はわかるんだけど、どうにも物事をそのまま受け入れすぎちまうみたいだ」

事実をありのままに述べれば、ニコラはキョトンとした表情から一転、淋しそうな表情を浮かべる。眉間に、きゅつと皺を寄せて、咳く。

「デイル。……そういうとこ、気をつけたほうがいいよ」

囁かれた言葉は心配からくるものだった。デイルは、ニコラの頭に手をそつとのせて、ありがとうと言う。事実を疑う必要があつたら、するべきなのだろう。だが、あまり気乗りはしなかつた。

魔女は箒から降りて、首都から少し離れた岸边を歩く。懐から杖を取り出すと、一言呪文を唱える。水色の光が彼女を取り巻いたのを確認すると、箒を呪文で小さくして、それをしまい込む。砂浜を進み波打ち際にやってくると、覚悟を決めたように息を呑み、そして海へ飛び込む。深い青色の海は、彼女の身体を飲み込んだ。



デイル達が貴族で無いこと 服装から判断されたのだろうか  
を察した旅芸人達は、口々に語り始める。女王に認められるほどの歌姫であること。ここ最近、歌姫の様子がおかしかったこと。そして、魔女を目撃した者がいること。それによれば、魔女は歌姫の声を奪った後、グロース＝ヴルカーンとの国境方面に飛び去って行ったという。

『あの魔女は帝国の手先なんだ』

という疑惑が、彼らを取り巻いていることを、デイルは知った。しかし、ウインディア出身だったという魔女が、他国の言いなりになるものだろうか。考えれば考えるほど混乱する。そんなデイルの態度を見ていた一人の青年が、落ち着いた場所で詳細を教えたいと話しかけてきた。朗らかな笑みを浮かべる、美貌の青年だった。黒に近い茶の髪と、濃紺の瞳のコントラストが調和していた。

「どうぞ、こちらへ。近くに美味しい甘味のある喫茶店があるものでして」

「甘いもの!? 行く!」

真っ先に反応したのはニコラだった。呆れるようにため息をついたりリムもしかし、甘いものなら悪くは無いと口端に笑みを浮かべる。言葉に甘えて、一行は青年に案内された。

入った場所はそれなりに内装の調えられた喫茶店。青年は店の奥の、話が聞かれづらい位置に三人を案内した。

メニューを見て、デザートを注文すれば、物の数分でそれらが運ばれてきた。リムとデイルはショートケーキを、ニコラは苺のタルトを。青年はチョコレートケーキを目の前に置かれ、めいめいに食べ始めた。ある程度食べるスピードが落ち着いたところで、青年は話し始める。

「私の名前はクラウドス。しがない医者です。訳あって、旅芸人の方々と共に各国を巡っていました」

魔術の発達したソムニウムにおいて、大抵の軽い傷や怪我、病などは魔術師の治療上昇魔法によって治されていた。しかし、重い症状に対する医療魔術は敷居が高い上に高度で、習得出来る者はごく僅かしかいなかった。そのため、医療魔術を専門とする魔術師が、医者を名乗り、それらの症状を緩和させると言うのが慣例になっていた。何から何まで魔術で行う医師が多い中、クラウドスは手術の出来る珍しい医者だと言う。

「歌姫　サキア・ブラックエイジの声は、魔法によって奪われています。喉元に紫色の紋様が刻み込まれているのですが、それが彼女の声を奪っているようですね」

顎に細長い指を添えて、クラウドスは言う。死に至らしめるような種類の物ではないが、しかし永続的ではあると。

「あなた方も、旅人なのですか」

「そーだよー。あのね、魔女を追いかけてるの」

運ばれてきた蔓のタルトをぺろりと食べ終えて、ニコラは言う。口の端にカスタードクリームがついていたが、どうやら気がついていないらしい。

「そうなのですか。では、魔女に言って、サキアの歌声を取り戻してくれませんか。きっと、サキアを妬んだか、あるいは帝国の手先かは解りませんが」

「まっつてくれよ。魔女が理由無く、人を傷つけたりするの？　何か理由があるかもしれないじゃないか」

一方的に彼女を責めたてるクラウドスの言葉に、少年は反発した。しかし、尚もクラウドスは魔女を軽蔑するかのような語調で話を続ける。

「しかし、我々は、彼女の歌を必要としています。あの悪名高い魔女が、何を企んで居るのかは解りませんが、理由はどうであれ、奪われた物は取り返さなくては」

腹の底から怒りが湧いてくる。思わず手をだそうとしたディル。だが、拳に、そっとニコラの手が載せられる。翠緑の瞳が彼を真摯に見つめていた。小さな唇が、そっと囁く。

「だめだよ」

はつと我に返るように、怒りがおさまる。どうやら魔女のことになると、怒りを堪えることが出来なくなるみたいだった。結んだ手のひらをゆっくりと開いて、小さく息を吐く。

そんなディルの様子を見かねて、リリムがクラウドスに話しかける。

「魔女は、帝国の方へ向かったんですって？」

「ええ」

嫣然と尋ねる彼女に、にこやかに青年は返事をする。

「魔女に会えたら、取りあえず理由を問い詰めてあげる。でも、それ以上を求めるのは割に合わないわ。だって、私達はただの旅人ですもの」

「……そうですね。サキアの事を考える余り、冷静さを欠きました。それで手を打ちましょう、フロイライン」

「かまわないわ、ムッシュー。ところで、一目歌姫を拝謁したいのだけれど、いいかしら」

クラウドスは頷き、給仕を呼んで支払いを頼む。ディルがちらりとリリムを見やれば、彼女はウイंकをかえしてきた。

テントに戻り、クラウドスが歌姫を呼んだ。彼は用があると言って去ってしまったが、その前にサキアに外套を羽織らせて行くことは忘れなかった。中から出て来たのは、長い黒髪の乙女。赤い衣装を纏い、その髪を頭の上で高く結い上げていた。表情は心なしか明るく、歌姫はディルと目があうと、にっこりと笑う。吸い込まれそうなほどの、黒曜石の瞳だった。

「あの、オレ達、魔女を探してるんだ。だから、魔女に会えたら、

声を返してもらおうように言うよ」

デイルが懸命に話しかけるも、サキアはゆっくりと首を振った。そうして、口元をそっと動かす。ニコラが同じように動かし、言う。「『契約の代償だから、仕方ないのよ。アナタはアナタの旅を続けて』」嬉しそうに微笑んで、彼女はそれきり口を動かそうとはしなかった。

身を潜めてどうにか帝国に忍び込むも、魔女は悩んでいた。と言うより、腑に落ちない点を疑問に思っていたと言うべきだろうか。「彼女」に言われた、儀式に必要な材料は殆どそろえ、残りは後一つ。しかし、余りにもうまくいきすぎている。

魔獣の牙は、砂漠で少年を助けたときに手に入れた。吸血鬼の血は、迷いの森の幻覚に苛まされていた少女から、その記憶を消し去るときの代償として手に入れた。歌姫の声も、人魚の瞳。視力と言う意味だが。も、気が抜けるほど容易く手に入れられた。魔女の髪も必要ではあったが、自分の物は最後に捧げればいいだろう。「確かに、次が最難関ではあるけどね」

最後の材料は、グロース・ヴルカーンで慕われている聖女の聴覚だった。魔女は、まだ自分がただの少女だった頃の記憶を思い出して苦笑する。聖女。テレーゼとは、腐れ縁だ。暫く、いや、魔女になつてからは会っていないが、あの面倒臭い性格は変わっていないのだろうなと溜め息をつく。

しかし、とやかに言う時間はもはや残されてはいない。次の満月までに手に入れなければ、最悪の結末しか待っていない。

魔女は心を決めて、帝国の裏路地を早足で歩き始める。聖女のいる、そしてあの憎むべき皇子のいる城へ向かって。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8991/>

---

魔女と心臓

2011年11月10日16時04分発行